

俳雑

第6回

【詩と俳句】

八木 忠栄

以前あるきつかけで、朝日文庫のアンソロジー『現代俳句の世界』全十六巻を買いこみ、片端から俳句を読んだことにより、俳句の広く深い並々なぬ魅力に仰天した。長いこと詩を書いてきた私が、俳句も書きはじめたとき、「詩がダメだから俳句に走る?」、さらに「詩への裏切り行為だよ」とまで陰口を叩く詩人が何人かいたし、「詩よりうまいね」という皮肉も聞こえてきた。「詩の墮落」と言い放つ詩人さえあった。しかし、歴史的にも、公然とあるいはひそかに俳句を作る詩人が何人もいたことは事実である。詩人の姑息な嫌味、と聞き流した。俳句は俳人だけの特権ではない。小説家も画家も落語家も、誰だってすてきな俳句を作っている例がいくらでもあるのではないか。

詩と俳句には、当然のことながらそれぞれ異質の難しさと楽しさがある。俳句には約束事や形式があつて一見不自由に思われるが、じつは《約束事や形式があるゆえの自由さ》がひそんでいる。詩作はそうした制約がないまま、《無辺のポエジーの海》へ漕ぎ出さなければならぬ。詩も俳句も、そのフィールド内に安住してははいまいである。ジャンルに拘りとどまつていてはなるまい。